



芥子園林

おてん屋

雪白く家根お氷れど。  
如何しせん妻子の餓。  
風寒く野宿とあけど。  
如何しせん妻子の凍。  
あ、是は浮世の苦厭はし。

雑物書仕入れ

夕暮茶漬くおて

母職の女房見返り、  
ささばよと身業せりふ、  
おてん責車ひき出づ。

乳餅カクセイ子コ泥ニが研リいで、  
文字ナ太タくおてんテン酒サケ  
燈チ火カ子コ好コトハ光ヒるぞ。  
おてん責サ車クルマ四シけケおオてテバ、  
風カゼ寒サムイしぬヌの子コの袖スベテハ。

火ハ燃ユて焰ヒ紅ベニム、  
湯ユのノさサぎギりリて酒サケのノ醜ウツクシよし、  
やヤきキ豆マメ厚アツク、ちチくク環ワザ、  
がガんン比ヒどドきキ、茅カヤ、蒲カマ鉾ボ、  
枘ツ甘カンさサるル止ト其ソノ香カひ。

函ハコ根ネ八ヤチ軍クニのノ音ネでテも越コえルが、  
越コえル越コえルぬヌおオてテんンやヤの、  
看ミ板イタ見ミてハ此コノ寒サムイこと、  
其ソノ身ミ種タネ子コ弟ニみミをヲ自コノ慢マン。

来りし車を二人連れ。

おい寒いなと店おまぢ  
ぐつと一杯引かければ  
酒は甜よし銚子よし  
喉の佛とぐびつと言てせ  
と臟六腑をわけめぐる。

えいさ田舎よー

ことつれぬと身をぶさし

ふるふ薬サ弱類張りて  
甘しと舌と舌打ち  
此処へおくよと鈔をつく  
是を今宵の初の客。

次ふ入り来る客は誰  
濡手拭をぶささけし  
風よひらめく暖簾の蔭  
人目と恐ぶ立食ハ  
店の年代の湯帰り歎。



腹蹴打つ下等社会の  
其人情は凄りなりし。

斯る向き小夜更に  
犬の遠吠一時歎三時歎  
道ゆく人と錦をたり  
大踏をめぐり笛の音の  
さつて梅樺の声哀れ。

こゝ来る客も有るまいし。

雪のふる夜も雨の夜も  
ふけては改るおど人魂の  
ちふじの憂<sup>うき</sup>辛<sup>しん</sup>甚<sup>しく</sup>。  
ぬむるはとも何時ぞや。

嗚呼<sup>ひやう</sup>類の汗で飯をくら  
是か浮世の常とてい  
已<sup>お</sup>けし<sup>の</sup>つ<sup>ら</sup>ま<sup>い</sup>に夜<sup>よ</sup>高<sup>たか</sup>人<sup>ひと</sup>。  
雨<sup>あめ</sup>几<sup>い</sup>雪<sup>ゆき</sup>の<sup>を</sup>戦<sup>いく</sup>ひみ。  
鬢<sup>かみ</sup>の霜<sup>しも</sup>さ<sup>し</sup>おき<sup>を</sup>保<sup>たも</sup>つ<sup>と</sup>人<sup>ひと</sup>。



窓の外にほほせの風の  
寒く吹さし露知たん  
おしの契の夢を温く  
眠る人さしあつ世の中  
何故老て夜暮来りし。

肌さし移さつてこれ衣  
防さぬぬかしぬの風。  
髪髪のを桐とばふき拂ふ。  
月さし氷るよこの夜の

巷の細し老の氣。

氣がめぐれば風鉄の  
音色もさして折めどろ  
都の巷も夜更に  
夜暮賣る声いと寂し。

嗚呼是七字世也去る二貴  
向ふより来りて荷をおろし  
其を互の骨休め。



如何に今宵の仕合了。  
否此頃の世の己のさ。  
とてお姫も皆眠ぬ。  
寒いお自も其丈振。  
早く取りえし様こそ徳。  
と被とこつつ西東。  
帰る秋の音いとさつて。  
さいけきさるのあはれ世よ。  
研んでいふ。そはあうい！

夢湯

今日と暑さハ夏の夜の。  
吹ぬぐ風のそよりとせ。  
卸ぬ袖も玉の汗。  
ちりてつとんと夕涼。  
月みうかこ人まし。

赤地の夢湯の文字太く、  
影暗燈の暗さ下。

釜の夾湯とさぎさせ、  
 三十嶋田の象化稱、  
 若し一木と叫入る、  
 声々(味な鼻調子、  
 色あふふりていかにいかな。

叫べば引る、浮れ男ハ、  
 町の若象吹車屋吹、  
 その椽甚お腰かくれば、  
 泣んで出ん湯の煙より、

厭おほ子盛ん登敬小、  
 釣止るぞ笑止なる。

見たい振して横目で見れば、  
 白地おほの浴衣のきぶりよく、  
 何をかけた奴赤袴、  
 袖のまくれで溢る腕、  
 ちりちり白く肉附る、  
 ちぎとまほしと胸波立さん。

それと見てとるせいの笑<sup>え</sup>凹<sup>ぼ</sup>。  
 一寸一ふく吸附煙草。  
 おあがりやさいとさし出せば、  
 煙のみまわれし男の機嫌。  
 何を誰を双燈火の昇<sup>あ</sup>れで。

おのよくつくと白<sup>しろ</sup>貌<sup>ぼう</sup>くれ。  
 うんきうよよと打笑ふ。  
 呑<sup>の</sup>氣<sup>き</sup>さしきの已<sup>い</sup>る點<sup>てん</sup>合<sup>ごう</sup>。  
 かうじてそつと股<sup>また</sup>さぶを。

つぬればあとの此<sup>こ</sup>氣<sup>き</sup>が。  
 縁<sup>えん</sup>とせつて翌<sup>あした</sup>日の花<sup>はな</sup>も。  
 又うかれ来<sup>き</sup>るとちぐさふ。  
 浮<sup>う</sup>氣<sup>き</sup>さしいでさいかいな。

氷水屋

風鈴<sup>ふうりん</sup>の音<sup>ね</sup>さへ絶<sup>た</sup>えておしあつさ。  
 今日此頃<sup>けふこのころ</sup>のてり續<sup>つ</sup>き。  
 何とせんとて裏<sup>うら</sup>借<sup>か</sup>屋<sup>や</sup>。  
 堪<sup>た</sup>ぬ暑<sup>あつ</sup>さよ追<sup>お</sup>走<sup>し</sup>られて。

一寸かきこむ氷屋の、  
露に涼しき水かよくり、  
めぐりの泡が細くぞや。

けづる氷の雪の花、

とけれバ光るぎやまんの、

白玉冷て水清く、

霍乱薬のどよ早、

身よしみかごと氷水、

肌の汗さへ何処へあつ、

執事を怠りいきりする。

ほつと一息ひといき下あがりを見れば、

水こそ安し鈔出ぬべし、

主人が機点まさき水お、

氣前きまへと見せし底みそ充溢みちあふ、

涼しき水の氷どけ、

ラムネの徳利ぎやまんの、

フツプの影をわうつをさん。

其上此処かしんしかり、  
 はせは俗衣の着化程、  
 一寸括びし襦子の帯、  
 ほどけかいらい何処となく、  
 なまぬくふりの情しき、  
 泡の美人とせらまぐれ、  
 入こお家の多か人。

せなとびに花も日もあけぬ、  
 男心の感見破りん。

来た人毎々せえおと、  
 ねもはせぶりなふり撮目、  
 元價いすんの愛敬と、  
 氷水より大安賣、  
 喜ぶ人の泡なさん。

一棗の氷水よし選り所、  
 一寸締結ラムネと一ツ、  
 物まいびり吹アイスクリイム、  
 氷ぶるこわさ、 白玉わさ、



誰がキ器用な十刀細工を。  
 糸より細き此二作を。  
 編んで小さき此籠のいろ。  
 舟をつくろひみがかきひご。  
 氣とをいしき紅鯉張の。  
 をみて見ゆるの葉の籠。  
 伏籠より似よるの念入の。  
 底の黒雲黒光り。  
 中を真紅の紐で結ひ。  
 結び目ふりはり結さがる。

ねし見事な籠細工。

此籠よりくのハ何の虫ぞ。  
 蚊虫、松虫、くつは虫。  
 がちのく、をいつちよ。  
 哀やわふ六月の夜。  
 其叢のふるさとより。  
 とりて此此の籠の虫。  
 夢よの籠とねむる人。  
 尺邊の虫身をこがれ。

きりく〜ん

其もとてこれ今日縁日子  
空しくびりり紅鯉の所龍  
露やしりき子の床の  
此夜の身とや歎くらん。

ねと哀や山龍の虫

ねとみやびな虫あきなひと

此はあより来る人の世

駒下駄かこころ虫家の嬢はん

雪太ちやうく西丸の坊ちやん

其小やりのせうと

可愛しくと彼をせ

袖ひきとめて立止まう

あれ母様や虫賣が

あれ松虫のないて居る

あの飲虫の声のよさ

買ふておくれとねぶるらん

子よ、目のなまき母親か、  
い、さり次男置ふてやる



甘きハヤガシ身の毒と  
知らぬぞ哀れ親心。  
子供は愛ふは是れなき  
買ふて貰ひしは籠さげ  
悔みちり〜 縁なき  
いとほし氣も其籠を  
一本の眺め帰りゆく。  
無心ハ小見録日の  
虫こそ哀れ虫なきは  
塵の歌の花はとん。

花賣車

照る日の影小塵立バ。  
都小色ハなけれど、  
花の色々みわびふも、  
車小つみて花めせと、  
花賣車めぐりゆく。

ひくと詠歌と眺むれば、  
雪の層と日おかけて。

や、色黒うなりぬれど、  
花こそ匂一日の眉、  
年ハ三女の乙女なり。

洗ひふりししの針目衣ふ、  
つゝめどあまゝる愛敬を、  
花ふこぼして世辞を賣り、  
おはれや賤の花車、  
浮世をめぐりはかなさよ。

花ふとまさう姿ありて、  
何故ひくや花車、  
同じ答ハ唯涙、  
哀れやさしき其懐お、  
如何なる苦や忍ぶらん。

雨ふる夏の夕暮と、  
風ふく冬の朝ふと、  
都大路の辻々を、  
唯花めせと呼ぶらば、

花壺車ひいてゆく。

哀れその女も若き。  
葎はふ家の戸しめて、  
愛らしき女は消ゆぬ。

知こ人の語りを聞か、  
父母のありあれど、  
去る冬を病み伏して、  
乙女子の介抱うくと、  
哀なる物語。

甲斐もなき女の身よて、  
父母のみとりをど、  
生活の事せしむ、  
身一つも負ふてきつ、  
己女子の悲しき如何也。

哀れ世の人ら、  
二親の子を賣入るもあつ、  
色をうる娘もあるか、  
此家の親と子ハ、

羨しき泣きの花を、  
賣いせむ花を賣る、  
羨しき女のばつ、  
商人の涙よこすべ、  
世みぞふる時雨の雨。

### 辻車

辻車ちりを蹴奔て、  
かけぬぐく靴の巻、  
さしてかく先ハ何処ぞ、  
ひくをのこ今を盛の、

花はれや其年頃  
鉄子よりほりての花  
減るここそ命ぢよふめ

さりながと玉敷るけ  
石説ふく前さへあけりゆこ  
是も苦のほほ世の勤死  
見よ汽車の中の窓  
くゆふる葉巻の煙小  
何見えして炊意氣揚に

何れの空へ舞はるる花に

嗚呼をぎはひもまけれど  
車夫よりつらき世のやあ  
或時、紳士のせし  
とこの花の陰場所  
或時、奥様のせし  
人目と為らぬ証の  
遊びお送る事もあり

若し夫れ通り一片の  
客ハ錢さへ出しぎひ  
ひどくねぎるを断れバ  
否せよよせの風情あり  
其さへまましぞとて  
乗せし引出し道遠き  
代ハ縁ぞ汗の一滴

若し夫れ夏の夕涼  
ふけし廓へ通ふ客の

あれバ名附て好き鳥と  
送ると嬉し其心  
足小土さへ宙を花び  
叱咤途上風を斬る  
常むハ貨のまさ故

斯く雨の日雪の夜も  
ふく風寒さき散寒も  
て了日燃つく三伏也  
客さへあれバ籠も撰ます

都大路の辻々を  
何処ともなくかけめぐる  
涙汗の滴を辛苦  
詭笑哀といはざらん

嗚呼生れ落から車塵と  
産れし人ともかゝ人を  
かゝる浮世の海の潮  
渡りか移るの不仕合せぬ  
或は血氣の後先見えぬ

己のい<sup>みま</sup>怠惰の癖ついでに  
因果の車輪廻の環  
めぐりめぐれど道つきぬ  
其骨折ハ牛馬の  
代り歎人<sup>の</sup>哀世や

金魚賣

ひるの熱さを吹拂ふ  
風を袂にふくませ  
花店ひやが老人の聲

津波つなみの如く押寄おしよる  
めちやどさくさの大混戦おほごえ  
又とや汗の玉と散ちる人

寄せくろ人を目当めあたりて  
此処小店をバ向むかきしと  
暑あつき夏なつのハ水高賣みづたかばいの  
涼すずしきさめ金魚賣こいしよばい  
得意こころよハ夏なつく小見こみおて  
其水いぢり快し

おい源げんちゃん金魚屋こいしよばい  
やお寄よりなかつ親おやさま  
其魂たまハ十じゆさのうま  
金魚の中なかにおれ入いつて  
夢ゆめの如ごとく現まれ幻まぼろの如ごとく

三さんの尾び、四よの尾びの太ふとり肉にく  
二にの尾びの瘦すくせと柳やなぎの腰こし



水おちじ 燈火の影  
はぬれバ 鱗の金光  
小見のみかハ 大人でも  
おはし 心を奪取す

おい其三尾と此四尾  
其まじまんの玉入れ  
賣ておくれと小見が言バ  
さじべをくつと玉入れ  
玉ころ光る燈火子

金魚うつりハ水清し

鳴呼魚子ハ涼し金魚賣  
八百八町ハ所々の  
其縁舟を見かけハ  
店をハ開ク夕暮時  
大人小見の足とひく  
金魚を哀れ水舟子  
自由な身と歎く人

おきふバと女もけし顔のむすむす

きぬ 糸のむすむすおきふ



淀の夜籠

雲はしる大空よ

月きつて干羽玉の

闇に女やなし淀堤

岸の柳の影くさく

秋の花ふけて風寒し

ふりつゞく秋さめぬ

水かさのまさりやしけん

河の西<sup>か</sup>墨<sup>くろ</sup>よりくろく  
岸<sup>かた</sup>を洗<sup>すす</sup>ふ淀<sup>いづ</sup>の川  
瀬<sup>せ</sup>枕<sup>まくら</sup>を流<sup>なが</sup>れゆく。

哀れ年頃<sup>としがら</sup>の兵<sup>へい</sup>乱<sup>らん</sup>ふ  
田<sup>い</sup>作<sup>さく</sup>と療<sup>りょう</sup>り<sup>り</sup>けん。  
名<sup>な</sup>ふ高<sup>たか</sup>き淀<sup>いづ</sup>の車<sup>くるま</sup>。  
川<sup>か</sup>水<sup>みづ</sup>お空<sup>あか</sup>しくかたれつ。  
雨<sup>あめ</sup>風<sup>かぜ</sup>を打<sup>う</sup>ちま<sup>ま</sup>りゆく。

ふけもハバ村<sup>むら</sup>々も。  
ねむりけん今<sup>いま</sup>ハ早<sup>はや</sup>。  
燈<sup>あかり</sup>史<sup>し</sup>の影<sup>かげ</sup>も見えぬ。  
左<sup>ひだり</sup>手<sup>て</sup>みくろき本<sup>もと</sup>林<sup>はやし</sup>蔭<sup>かげ</sup>ふ。  
犬<sup>いぬ</sup>のなぐ声<sup>こゑ</sup>いと寂<sup>さび</sup>し。

何<sup>なに</sup>者<sup>もの</sup>ぞ尾<sup>お</sup>花<sup>はな</sup>のしげる。  
柳<sup>やなぎ</sup>の蔭<sup>かげ</sup>よりごめくり。  
水<sup>みづ</sup>舎<sup>や</sup>の埒<sup>らじ</sup>子<sup>こ</sup>迷<sup>まよ</sup>ふ奴<sup>やつ</sup>。  
瘦<sup>すく</sup>犬<sup>いぬ</sup>の食<sup>く</sup>を死<sup>し</sup>食<sup>く</sup>の奴<sup>やつ</sup>。

不短剣の後尻の光  
闇き夜の闇よきふく  
曲者と許は見えざらん。

許そ骨響の寂寥と  
破りて是ぶ音にそむ。  
鑢の音りん  
蹄の音響せ。  
思ふと細音く定堤を、  
騎馬武者のニミイ騎

何処へゆく馬音と並べて。

見上蹄とよみ柳の蔭  
鎧の袖や草摺の  
鼠の走り如ひたり  
駒より降りて武具脱げば  
山石と包む鉄の  
骨太んと肉同き  
鬼せし控人裸体の勇士。

忽ちよ何の面おも。  
ざんぶをあげろ水烟、  
きりろハ園ううとかの、  
命ハ軽し名ハ重し。  
背あり陣太刀一文字、  
河と斜まよおよぎぬく。  
あし今ぞ知る此一像  
瀬踏の為子あぶると。

一騎あり堤お立ちて。

人々の瀬踏の標、  
眠と決して眺てぞ居る。  
穂のまびさし深き陰、  
光るハ星双の目如、  
腮ハ虎鬚丸を嘲りて、  
成凡ハ草とよ麻あはし。  
嗚呼彼ハしと一隊の長お如、  
君ぶ次女の甜氣絨、  
同じ色糸の甲かの鱗う、  
しめて手細の唐鏡織。

鞞下の駿足凡子嘔一ハ、  
息子也ふくの荒吐く、  
馬上の打扱いかめしきよ。

柳しやあれ牛馬あきて、  
あやめとあめ河の面子、  
是日乾のころ三ツ四ツ、  
おぶ雲は見えつかくれつ、  
瞬くは燈火の晝吹、  
葦の葉をふく秋の風。

蕭々として物凄し。

皆時こそあれ彼猛者も、  
駒を降りし柳の下、  
糸綱と枝ふひき強一バ、  
凡子散れし散る木葉、  
鎧の袖もふりかゝる、  
拂ひもやうに武具脱棄し、  
背負ふ陣太刀丈長し。

ふめが冷とし雨後の土。  
堤をかりんと薄雲。  
露ふみ分る刹那。  
柳の陰より彼曲者。  
矢声をかけて引組みつ。  
めくや電劍の霜。  
柄も微れとせむ腹をさむ。

哀れ乾の場と<sup>ま</sup>いり、  
一星存し一星輝く。

常世とよしの世として。  
世に鬼神と歌をれし。  
伊賀のちぶづの露とほく。  
頼兵衛の姪子とををかく。  
義談の今子かくれなし。



日章旗

西

扶桑の東太平洋の  
旗影あり朝風を胚みし  
宇内を翻てひろがる。  
見よ其中に旭日の輝くを。  
是我帝国の國旗なりや。

此旗のひろがる所  
強敵も靡さすなりし。  
此旗の向ふ所。



堅城も拔さるやし。  
此旗ぞ是大和民族ガ、  
愛国心の記號なればや！

想ひ起は日清の戦の日、  
此旗如何又韓嶼山小、  
夜嵐を胚んで翻りけん！  
此旗如何又支那大陸の、  
日本魂と叫起しけん！

渤海の嵐波碎けて、  
敵人の膽寒く、  
支那艦隊を討沈めて、  
萬國の威を輝しよと、  
是ぞ此日幸旗なればや！

日幸旗！日幸旗！  
天下の山河汝の爲に凱歌なり。  
汝ハ我々ガ心の記號なり、  
汝ハ我々ガ勝利の記號なり、

汝、~~日本~~の心を表れ！  
日本、~~地~~の心を表れ！

大島圭介

曾て王師に抗て

越野の地

又五陵廓に據り

朝廷の威

兵謀<sup>ひ</sup>戦<sup>いくさ</sup>果<sup>は</sup>然<sup>る</sup>

天下を以て許す

唯勢の不可あり

皇家に降す。

向ち教く韓山

凡雨急よ。

鷄林八道

雲濤まく。

朝廷君を起して

韓国に使ん。

韓国の山河

衰残と如何。

弊政の改革

君の一臂を待つ。

君の韓王に面して

五條を敷ふ。

袁世凱

彼何者ぞ

韓国の獨立を拒んで

我儀を辱く。

形勢の

危急なり。

君や院君と起して  
國旗と作る。

鞆砲一發

京城と壓おさす

彰化門前

旭旗罷る。

孺子世凱

何処どこかある。

一夜遁逃

願脚ねんきゃく七かく屯。

君即ち入朝

詔書と請ふ

牙山の清兵

討て退くべし。

日清の戦開

君も依り幕明く、

嗚呼君ととひ今

文臣とさる也

兵ハ元是君ガ

家臣ノ法

笑テ見ル見孫ノ

清兵ヲ討ツト

野津將軍

東洋ノ天地

雲慘々胆

韓山ノ雲雨

雪山暗シ

詔書降ル

將軍セ起シ

將軍兵器ヲ把テ

平壤村ニ向ス

霧ハ大同江ニ横ハリテ

朝日暗ク

風ハ大旗ヲ翻シテ

万馬嘯ク

雨サ蕭々

風訊ル

日兵南々

平壤より迫る。

平壤山岸の高地にて

城險を頼む。

清兵三万

據りて以て守る。

自ら謂ふ

金城湯地の固也。

何ぞ知らん日兵

奮闘勇まらざるぞ。

山何処あるん

海何処あるん

喇叭一聲

砲聲起りし。

船尾橋也

百雷轟く。

牡丹其更上

山嶽崩る。

清兵支つん

城と幕まで道了

將軍馬を鞭うって

城頭小立てバ

旗ハ翻々として

金袍輝き。

威ハ韓山之壓して

凱歌湧く。

樺山將軍

勃海波ハ碎けし

■砲艦現れん

曉霧海を蔽ふて

長鯨躍る。

忽ち怒るく

霹靂雷雲を破つて

砲丸海上を飛び。

砲烟天を蔽ふて

百雷鳴るを。

天漢々！

海濛々！

戰崩

何時に於て人

忽ち見了

高船の軍士

戰場に登了也。

恰も似たり

義人長刀

戰場に望み子。

奮戦血闘

勇驚くも足了。

唯逃し高船

敵彈を受て、

根折れ船碎けし

進退苦むと。

之を見て敵艦

機不果して来り。

此時一將あり

船頭を立つ、



喝していふ敵の

中腹を衝け。

声ハ潮と叱して

士氣奮ふ。

勇ハ三軍を鼓して

鯨波奔る。

高船西京丸

即ち楯と押しし

敵艦を突く。

敵艦逐巡

其針と転ん。

我即ち策して

以て退る。

高船を以て

軍艦と戦ふ。

海戦ありしより

未だなき所。

船頭の將軍

彼ハその許

薩南の男兒

樺山將軍。

時人敬馬と歎じて曰く

樺山將軍

一心是膽。

君が威殿子

清國と答して

北京の朝廷

鼎節く。

伊東中將

將軍

神武あり。

風年

春花の如し。

海洋嶋の沖

丁汝昌を破り。

威海衛の濱

敵艦を殲ん。

威、山東を壓して

名天下に轟き

凱歌起す所  
民君と歌ふ。

山地中將

獨眼將軍

鬼策あり。

意氣最也

不識卷子似り。

快馬長剣

指麾廻旋なり。

雄心早く

四百州を吞み。

眼中既し

清國なし。

一挙全州を屠り

長駆旅順を攻む。

旅順の清兵

膽氣胆み。

君の旗を見らば

逃走事とん。

朝之城を攻て

夕之を防し。

將軍馬を城頭子繋りて

~~城頭~~

一笑してまてバ

凱歌旋順と振りて

君の威揚す。

戦死者を吊り

日と胡山ホかりて

霜しろく、

風と野草を吹て

夜寂々、

戦死の旅魂

今何処にあり。

嗚呼丈夫

戦場子想む

何ぞ生ん

還るを望まん。

旗の動いん

万馬嘯き。

喇叭鳴り

劍花閃々くの時。

諸君奮闘

辰と夜と暑いと。

愛子一至誠

鬼神を感ぜしめて

芳名永打

見孫と照らさん。

初四 旅代敷

余の性旅行を愛し、時子勝地を尋ねて遊ぶ。遊ぶが即ち感あり、感あるが即ち歌ふ。左の記をこの其類なり

箱根の峯遊

雲かゝる函根の險をよめし、山は高ふして崖蒼蒼し、風は涼ふして木樹そよぐ。布とさきんは谷川の

水ハ<sup>一</sup>無<sup>二</sup>然<sup>三</sup>岩<sup>四</sup>をかみ、  
凡<sup>ノ</sup>香<sup>る</sup>や<sup>山</sup>崖<sup>際</sup>の。  
花ハ一輪<sup>山</sup>百合<sup>清</sup>し。  
おもし<sup>ろ</sup>や<sup>岩</sup>を<sup>仔</sup>ふ<sup>山</sup>陰<sup>の</sup>。  
清<sup>水</sup>流<sup>れ</sup>て<sup>音</sup>清<sup>く</sup>。  
松<sup>の</sup>樹<sup>陰</sup>の<sup>蔭</sup>蔭<sup>は</sup>あ<sup>ら</sup>。  
一人<sup>の</sup>老<sup>婦</sup>草<sup>子</sup>を<sup>賣</sup>る。  
あ<sup>い</sup>ん<sup>の</sup>熱<sup>し</sup>こ<sup>の</sup>山。  
甘<sup>い</sup>酒<sup>が</sup>江<sup>部</sup>が<sup>茶</sup>を。  
茶<sup>根</sup>の<sup>実</sup>礎<sup>を</sup>砂<sup>し</sup>。  
権<sup>現</sup>の<sup>社</sup>木<sup>を</sup>深<sup>し</sup>。

湖水<sup>の</sup>足<sup>を</sup>洗<sup>せ</sup>て。  
袂<sup>を</sup>凡<sup>に</sup>吹<sup>れ</sup>れ<sup>ば</sup>。  
か<sup>の</sup>二<sup>班</sup>の<sup>雪</sup>の<sup>こ</sup>る。  
富<sup>士</sup>を<sup>波</sup>上<sup>に</sup>見<sup>み</sup>ど<sup>う</sup>。  
酒<sup>と</sup>箱<sup>根</sup>の<sup>宿</sup>を<sup>呼</sup>び。  
石<sup>坂</sup>道<sup>を</sup>お<sup>り</sup>や<sup>け</sup>ば。  
草<sup>を</sup>茫<sup>々</sup>と<sup>布</sup>里<sup>の</sup>風。  
日<sup>ハ</sup>烈<sup>々</sup>と<sup>炎</sup>熱<sup>の</sup>地。  
嗚<sup>呼</sup>封<sup>建</sup>三<sup>百</sup>年。  
天<sup>下</sup>と<sup>叔</sup>し、箱<sup>根</sup>の<sup>陰</sup>也。

今ハ文明泰平の世とて、  
哀れ越ゆる人なまなく、  
さしかけたる屋の樞一人、  
走らば氣車とハ見えて恨む。

久能山

曾て聞く駿河の海。  
今を登る久能山。  
山勢天心を衝き。  
奇峭雲外に徒耳也。

仰て宇宙の大を極め、  
俯て海潮の音を聞かぬ。  
嗚呼東海此山あり。  
以て東照公を祀りて。  
英魂永く享く見孫の祭。  
廟門粉壁輝き、  
神廟威靈爽々。  
雄圖千古存じ、  
今人英風を慕ふ。

岡崎城の願望  
草昧英雄を生み  
英雄天下を鏖む  
古今一圖の如し。  
嗚呼海内凡醒き夕べ  
草深き岡崎城中  
吼々の声浪が奔し  
西鞞業三兄の飛劍  
四海の乱を掃ひよる  
神皇家康の城

今尚壞垣存じ  
残礎秋草深し  
嘗て瓜斬ぐ秋の夕暮  
城小登りて四方を望めば  
蒼烟耶成と竹籠し  
山川尾隈より来る  
嗚呼古を想ふと英雄を欽じらむ  
昔人已お去て影ひく  
唯矢矧川の流るしを思ふのみ。



桶狭間の懐古

雲の暗ふして雷轟き

雨の激て万山嶽鳴る

鳴海の北桶狭間の向

此地重んじ三軍と知り

●戦勝て待驕り  
備存ふしと敵不意に棄り

雄圖織田氏の功

尾及男見あり

天下英雄と称ん

関ヶ原の懐古

見渡せば草茫々たる関ヶ原

蓬の枯て風寒く

西霧<sup>心</sup>落て月悲しむ

さびしき秋の古戰場

流ぐ摩墨のまき捨ぞや

月の描ける菩提山

凡そ琴ヶひく松尾山

最子春のしのぼるい  
つは若共の童子の跡  
秋の草のみ最繁し。

嗚呼一将功成万骨枯  
兵の誠は山畧はる哉  
旅人杖とよめて若と吊る下  
凡の寒し枯那の霜  
天の高し一輪の月。

琵琶湖の降り  
氣船琵琶を降り  
長風春霞を断り  
標の高し三井の鐘  
凡の吟は唐崎の松  
烟波新々の愁  
途は千古の事  
海を向ふ之と向ふ人  
日光曆山ふかくれ  
舟大津ふつく。

大坂城  
大城規模宏潤  
城優水青々  
猿面藤吉の鏡  
坂城園西と鏝ひ。

成田紀行途上の歌十首

此時余朋友の僧の衣をまとふて旅しけ  
此ハ衣を出づるとてかく

こはおれも今朝衣かり着しぬけと

しのむらくとさざりけり

東寧川よし帆楫船の波を破りて走ると

見え

利根川の川おひての丸をはらませし

白帆の晁のはしりぬく見え

野志地ハ桑ふしをみれの美しく嘆くと

見て

習志野の木の下陰の草をみれば

つまは枯れや人見てのみぞや

賤が丸の垣の卯の花を見え

しるしと雪やつとれり道野郎の

賤が丸居の垣の卯の花

民家五月櫛とまて節句と祝つ

と見え

みぢの民の祝つる櫛をぞ

こゝ日の本の風うほつたれ

こゝろ細き夕暮村井の宿を越つと

うき事を誰か詔とん存衣

ひちまさうやく我袂かた

印幡沼の夕暮

印幡沼も長閑小浦船の

こきやくと見え春の夕暮

宗吾神社み宿ん

とろくのとろくまふししみまされば  
まよとろくお阿保がるゝかな

成田の不勤草上話を

信仰の塵かつとれり成田山

不勤草上(光りか)しく

成田と出づつ使ふ大崩よりぬれ

ハ雨川と賤が家子さけ

雨川としのきとびとる賤の家

衣の袖のかはくまとなし

西比利亞旅中の詩歌抄

箱館の港を船出せんとし

氣船朝子出つ函館湾

煙筒の黒煙沸く日外

波の高にして就地躍り

所帯の深おして前路を埋る

海國の男見所を奴馬れん

天涯知己有り

四海比隣の如し

矢越の岬、カ標の港

雲霧は傳拂し去り盡して  
一船直に指さん北の方の天

夕暮凡れは高ふなりけり時、船のと  
あゝ嶋蔭を過らせければ

かふされはさく胡砂の凡れ  
きりまくれゆく蝦夷のしま山

船の難難海に入りける朝  
はの〜と眺めく方の海の内よ

今日とつ國の山を見るかな

黒龍江の碁をたらしける日の夕暮  
こゝれ来し子と海の本遠く  
けふあひうらみ船かゝりたる

同じ時船頭おまへ四方と望みつ  
黄雲山は遠し薩哈連嶋  
潮海は高し黒龍江  
陸と長江お下し船頭お出づれば

落日斜小水、りて彩霞映じ  
白雲峯より人て霧波上あり  
嗚呼故郷此処と去る縁千里  
江風衣を吹て思綿れ

尼古本埠頭の晩景

尼古本埠頭夕陽沈み  
長に一世帯白露横心  
前山江と隔て、煙り  
大船碇とあらし泊り

日本の小艇波と追ふてゆき  
露國の端、舟丈とわしと廻り  
コンスタンチノフ岬、ワエルマの岬  
ギリヤ、異装妙上と臥し  
露人傲顔棧橋をゆく  
紳士の服装ハ、教人を欺き  
少女の衣類ハ、象目とひく  
長身ガガツク兵  
大魁スラウロン人  
革帯長靴馬と駆て去る

一日小舟に乗りて里江を降る日暮  
風起りて波大なり揚る。四顧溷濁茫々  
して山をとどり

胡天所云遊し難艱海  
林番霧ハ横ふ里江  
山河ハ知れん旅客の心  
舟舟一葉眺み向ふ去る  
借問ハ今夜何の処に宿る  
凡ハ潮を捲て波山の如し

難艱海岸の口ニケ村近傍舟行の

時の件

朝ハ尼府を辞して普露武帯お降る  
暮ハ胡舟子乗し一連江を揺る  
黄地の杜松夏高枯れ  
岸上の野花面を打し昔ふ  
一松折採り舟子子向ハバ  
舟子虎鬚燕人と吹さ  
土人獸語意を解せし



笑へ相顧みし鳥春を為花  
興子乗舟し船を舟研子嬉笑さ  
岸ふ登りし雲端眺を決せば  
凡ハ江面子起りし波千里  
雲ハ波上を躍りし月一痕  
嗚呼都人の知らん遊子の情  
眺ふ大江を向へ船歌と歌ふ

プロンゲ村日本小屋の生活  
意木の桂草のかこひ

昔の家根をい雨にりし  
蒲団の上を月夜る  
プロンゲ孤村の日本小屋  
八月半書高史と林土さ  
寒し凡半夜夢辱おどろく  
ゆく子船ゆく遊ぶ子祈りく  
終日徒然無聊子嬉へん  
静子研とふし心海岸をわげバ  
草一高ふし心身を貸し  
波々思へ巖をかか

蒼烟漂渺より樟太嶋  
雲霧縹緲よりじやうしの岬  
鳥むらび波上を飛び  
船ありゆいより来り  
断崖を攀り後山に登り  
草を拂い森林子入れば  
林の暗より人跡と見ゆ  
風の冷めりうより枯樹を命を  
異禽梅頭小啼き  
栗鼠林上を走る

嗚呼故郷と出て十有五句  
蕪蕪海の西音信絶えて  
黒龍江の北夏の夜長し

東寧川舟行の夜雨ふる曉苦をかへけ

こよむ

故郷を出て東寧川  
船でくぐれば雨ふりかへり  
浪はぬれぬ船ぬれぬ  
今朝は如何と苦あけ見れば

朝日小景小無路  
芝了  
山岸田小不草色清し

姑蘇城外寒山寺  
夜半鐘聲到客船

